この人にインタビュー

日孝建設有限会社（可児市川合 887-1）

代表取締役

加来義人（かくよしひと）氏（60歳）

インタビュアー　●広報委員長：井澤秀明　●広報副委員長：若尾宗徳

可児市で建設業を営まれている日孝建設有限会社 加来義人社長にインタビューさせていただきました。

御社の概要を教えてください。

平成11年10月に会社を設立し、今年で27期になります。親も建設業でしたが、あえて頼らず“裸一貫”でのスタートでした。今思えば、若さゆえの勢いだったかもしれません(笑)。最初は愛知県で仕事をし、その後地元に戻ってきました。

下請けから始め、公共・民間事業、造成工事と仕事の幅を広げ、現在はほとんどが地元の民間工事です。重機は大小10台、ダンプも自社保有し、外注に頼らない「自社施工」が強みです。

また、９年前には滑り止め事業を開始し、株式会社日孝T&Kを別会社として設立しました。瓦の廃材を利用した滑り止め技術に可能性を感じ、代理店として参入しました。現在では全国47社が加盟する（一社）日本防滑推進協会の副会長も務めています。

「妻が社長で、私は一職人なんですよ（笑）。イベントにも出ますし、女性社員とアルバイトも一緒にがんばっています。」

瓦材をリサイクルした滑り止めはエコであり、労働災害防止・健康経営にも貢献でき、まだまだ可能性を秘めた事業です。

SDGs・健康経営の取り組みについて

SDGsは、建設業が果たす「よりよい社会基盤をつくる」という使命と重なるものと考えています。環境負荷の低減、安全で働きやすい現場つくり、地域・次世代への貢献。この３つを軸に、“日々の仕事そのものがSDGs”となるように取り組んでいます。

健康経営については、建設業は体が資本の仕事です。夏は灼熱、冬は極寒、腰は痛いし時に

は心も疲れる。私自身「これじゃいかん」と思う時期がありました。

「社員が元気じゃないと現場は動きません。私も動きません(笑)」社員の健康を守ることが何より大切。

具体的には、朝の現場でのラジオ体操と体調確認、暑い日のこまめな休憩・水分補給を徹底しています。昨年の夏は特に暑く、日陰ゼロの現場では“修行”のようでしたが、事務員さんが毎日アイスとジュースを差し入れてくれたおかげで、何とか乗り切れました。外作業の多い大変な仕事ですが、社員がついてきてくれることに感謝しています。

また、定期健診は全員が受診し、結果のフォローもきちんと行っています。年齢に応じた仕事配分にも気を配り、当社には20代から80近い方まで在籍していますので、高齢の方には掃除や片付けを担当してもらっています。

外国人も数名在籍しており、ベトナム・フィリピン・インドネシアなどから来ています。建設業は朝が早く、体力的に厳しい仕事ですが、なかには「この仕事が楽しい」と言って実習生から特定技能へ移行する人もいます。

地域との関わりや社会貢献について、お伺いします。

若いころは仕事一筋で、団体活動には一切参加していませんでした。しかし40歳で法人会に加入したことをきっかけに社会貢献の大切さに気づきました。

「活動を通じて地域に知ってもらえる。法人会が私にとって社会貢献の入り口でした。」その後、商工会川合支部、可児市建設業協同組合、ライオンズクラブへ加入し、地域貢献活動を続けています。

災害時には重機を使った復旧作業など、建設業だからこそできることがあります。地域のためにできることは積極的に取り組みたい。造るだけでなく、守ることも大切だと考えています。

趣味を教えてください。

ゴルフと庭づくりが２大趣味です。

ゴルフは30代から始め、「練習に行くくらいならコースにでます(笑)」というほど。自然の中でプレーすると心も体もリフレッシュできます。

庭づくりは、自宅裏の山を購入したことがきっかけで楽しむようになりました。木の伐採や草刈から始まり、車庫・東屋・門、さらに愛犬が遊べるドッグランまでDIYで作りました。出来上がった庭で愛犬との時間を楽しんでいます。

法人会員として思うことはありますか？

49歳のときに青年部会長を務めました。

「あの頃が全盛期でした。とにかく一生懸命やり、そして一生懸命遊びました。」

青年部会を通じて他支部・他単位会とのつながりが生まれ、仕事にもつながりました。その縁こそ、何よりの大きな財産です。

最後に一言ありますか？

「歴代のインタビューを読むと本当に勉強になります。これからは若い人に譲りつつ、人のために何か一つでもできればと思っています。」

社員想いでアットホームな社風、そして「やるなら100％本気で」という創業者の心意気が強く伝わるインタビューでした。